

院長 和田誠基が

糖尿病・内分泌の患者様を
診察するわけ

第九部

埼玉医大からの民間生活

18歳から続いた公務員生活に終わりを告げ民間の埼玉医大に職を得ることに、宇和島の父母は強い懸念を呈しました。卒業後に従事した内分泌・代謝研究を継続したいということ、大学でのポジションを得て研究・臨床・教育の分野で自分なりに将来の可能性にチャレンジしてみたいことを説明し、両親に納得してもらいました。狭山市の自宅から車で30分程度の毛呂山町では、自分たちの研究に必要な研究室と機材を整えて頂き、さらに幸運にも、文部科学省の基盤研究費、各種財団助成、企業からの研究助成を得ることができました。これは当時、埼玉医大に招聘いただいた内分泌・糖尿病内科片山教授のご支援の賜物です。研究には、埼玉医大卒業で私と年も近い北濱先生（現 川鶴クリニック院長：川越市）が興味を示してくださり、また大学院の学生として須田先生（現 須田医院院長：千葉県）、安田先生（現 埼玉医科大学講師：毛呂）が研究室に配属となりました。研究テーマは血清カルシウムの維持・代謝調節機構で、マウスやヒト破骨細胞（骨を壊す細胞）を実験環境下で培養し、その遺伝子発現の変化を検討したり、糖尿病などの病態が骨という支持機構にどのように影響するか検討するものでした。研究は楽しく、順調に推移し、国際誌にも複数の結果が採用されました。

その後、北濱先生は、私がかつて教えを請いたオーストラリアのDavid M Findlay教授が



学会での集合写真

就任した、アデレード大学に渡豪しました。また、防衛医大の後輩で整形外科の佐村先生（現 花園整形外科内科院長：所沢市）が自衛隊富士病院から学位取得のために研究に来てくれました。佐村先生にはヒト破骨細胞の研究をお願いしたのですが、そのために毎週私の血液から白血球を取り出して培養するため私は貧血となっております。佐村先生に引き続き、防衛医大整形外科から甲川先生が国内留学で私の研究室に配属となり、分子生物学教室の松本先生とともに破骨細胞分化における転写因子の研究に従事し、後にアデレードに留学しました。

臨床では、甲状腺グループのリーダーである飯高助教授にご指導頂きながら、甲状腺、副甲状腺疾患に関して、臨床研究を発表しました。内分泌はマイナーで地味なフィールドでしたが、素晴らしい仲間にも囲まれて仕事に従事できました。防衛医大でもラグビー部の後輩・教え子たちが集まってくれましたが、埼玉医大でも、チューター制度で指導した学生さんたちに囲まれました。このような環境で息子の雄樹も医学を志すようになったのだと思います。

研究という一つの目標で、国内・外の方々と継続的に意見交換ができたことは貴重な経験でした。埼玉医大では貴重な7年間を過ごさせて頂きました。埼玉医大で仕事をしながらも、民間として売り上げを主体として患者様に入院・検査をお勧めすることなど、自分が社会に役立つ役割を担っているのか自問自答する日々でもありました。そのようなタイミングで、次の転職へと進むことになりました。



大学院生の学位祝い

今回は、城西国際大学での経験をお伝えします。